

博多の町に火の雨が降って焼け出されたとき

福岡市南区 深見 陽一

B29は背振山脈を越え、高度8000mで油山の方角から侵入してきました。単機、または2、3機の編隊で飛来し、上空を円を描きまわりキラキラ光りながら焼夷弾を落としました。ヒューという音、シャーという音が気持ち悪く耳に響き渡り、次々に火の雨が降って来ました。昭和20年（1945年）6月19日夜の福岡大空襲の恐ろしい思い出が昨日の夜のことにように臉に浮かびます。

もう博多の町は火の海。B29は探照灯にとらえられて須崎浜や平尾の高射砲の撃ち上げる砲火を浴びますが、情けないことに弾は届きません。奈良屋・大浜・春吉・大名校区と次々に火の手が上がりました。焼夷弾は5kgと50kgの2種類であり、5kgの物は10本から20本と大きな束となって降って来ますが、途中でまるで花火がはじけるように広い範囲に広がって落ちて来ます。それが火の雨のようにシャーという音を立てて降り注ぎます。また、大きな50kgの物は落ちた途端に爆発して、火の塊を四方八方上下に撒き散らしました。我が家（旧土居町、今の冷泉公園の東側）にも大きな音をたてて50kgが私のすぐそば（5m位）で火の塊（油脂の火の玉）を飛ばしました。

幸いにも5mの間には事務用の机、椅子、そして書類箱などがありましたから直接火の玉を被ることはなかったのですが、落下の瞬間飛び散った油脂の火は次々に木造の壁、柱、そして屋根組を焼き、風をはらみ、唸りをあげながら広がって行きます。全市火の海となりましたので警防団や婦人会員によるバケツリレー、竹ぼうきの消火も間に合わずに命からがら逃げ出すのがやっとです。数十m、いやそれ以上もあるような火の塊がメラメラと不気味な音を立てて空をこがして熱風を吹きまくり、全く地獄のようです。炎で上空のB29の機体が赤く染まり、赤鬼が襲いかかるような恐怖に被災者達は着の身着のまま避難するしかないのです。

30分、そして1時間も続いたでしょうか、無差別投下の焼夷弾に負傷し、血まみれになりながら火の手に逃げ場を塞がれて中洲や川端の川に飛び込む人もありました。博多湾の船、大濠公園の樹木も直撃を受けて赤く燃え、護国神社、光雲神社の社殿を焼き尽くし、西公園電車通りの天理教の教会も炎を天に巻き上げました。福岡城跡にある西部第146部隊の兵舎も跡形もなく灰になりました。その火の海は北九州や久留米、浮羽方面はもとより、遠く離れた佐賀県や長崎県、そして壱岐の島からも眺められたという凄惨なことであったのです。

この空襲で最も惨烈を極めたのは福岡市内でも特に博多の町でした。熱風と炎に迫られて安全な場所として逃げ込んだ場所が地獄となったお話は酷いものでした。下川端町の十五銀行ビル（現在の西日本銀行博多支店）の地下室での惨事でした。避難者にとって鉄筋コンクリートの地下ほど安全な場所はないと思ったのに、周囲に焼け落ちた炎が明かり取りの窓より吹き込

み、保管してあった軍用資材（車のタイヤ、地下足袋など）を焼き、有毒ガスと熱気により地獄になってしまい、殆どの避難者が苦しんだ末に黒焦げとなってしまいました。出口のシャッターが停電で上がらずどうしようもなかったのだそうです。

私は当時上土居町三井銀行の福岡支店ロビーで、周囲から避難してきた10数人の人達と空が明るくなるまでまんじりともせず恐怖の一夜を過ごしました。夜が明けて外に出ると、総重量360tに及ぶ焼夷弾の火を浴びた博多の町は一面霧のような白煙の中になりました。煤煙の匂い、そして何とも知れない気分の悪くなるような嫌な匂いの中で、思い出したように小さな炎が上がり、外壁だけになったコンクリートのビルが黒焦げの電柱を支えていました。勿論私の家は丸焼けです。市内電車の架線が路上に落ちてしまい、それをまたいで熱気を含んだ道を歩いて行くと、木煉瓦舗装の上土居町などの路面は焼け焦げてしまい、でこぼこ道となっていました。冷泉小学校の横には十五銀行ビルなどから搬出されて来た焼死体が寝かされており、伸ばした両手を握りしめたり、お互いにかばい合うようにして倒れた親子など、どれもこれもあの恐ろしい焦熱地獄を忍ばせていました。

被災者の救済はかなり難航しました。私も『戦災証明書』（被災証明書？）なるものをもらって、あちらこちらで食糧や日用品を僅かずつでしたが配給を受けました。たくさんの人々が焼け跡の整理をするまでもなく親戚、知人を頼って福岡から一時疎開し、残った人々は最寄りの学校やお寺に合宿しました。わたしもその一人でした。もう、情けなくて…。肉親を失ったり行方不明になった人達の調査、そして遺体の収容など思うように進まずに悲劇は続き、当時の福岡市全市戸数の3分の1以上を焼失、被災者5万9千人以上、死傷者3千人以上ということで復旧作業は難航しました。

くすぶり続けた博多の町が完全に鎮火したのは丸3日目、昭和20年6月21日午前7時頃でした。この日がちょうど夏至。1年中で一番長い日の博多の夏がギラギラと太陽に照らされました。そして7月27日18歳で赤紙（召集令状）、7月30日久留米48部隊入隊、部隊編成し志布志湾へ派遣。8月15日終戦。8月31日復員。

翌昭和21年7月博多の焼け跡の町を力水を浴びた祇園山笠が駆け抜けました。一番被害の酷かった奈良屋校区で子供山笠が元気に走りました。それは、焼土の博多の町の人々にとって戦後復興への大きな力となりました。

戦争のためたくさんの犠牲になられた方々のご冥福をここに改めてお祈り申し上げます。

合掌